

時代のしるし

北 村 泰 彦

「あなたたちは、夕方には『夕焼けだから、晴れた』と言い、朝には『朝焼けで雲が低いから、今日は嵐だ』と言う。このように空模様を見分けることは知っているに、時代のしるしは見ることはできないのか。」（マタイによる福音書16章2,3節）

以上は聖書の一節であるが、自然現象を観察し、そこから普遍的な法則を導き出そうとする自然科学の方法論を的確に捉えている。当時は自然を観察する手段と言え、人間に備えられた五感に頼るしかなかったであろうが、現在では様々な計測機器が利用可能になり、精密に自然現象を観測することができるようになった。そこから得られる法則もより客観的で、より精度の高いものとなっている。発見された法則は科学技術の基礎であり、その恩恵によって、我々は一見、豊かで便利な文明を築き上げることに成功した。しかしその一方で「時代のしるし」に対する関心は、聖書の時代から2000年経た今でも、あいかわらず低いままではないだろうか？「時代のしるし」不在の科学は様々な問題を引き起こす。

その象徴的な出来事の一つが、世間を騒がせている「耐震偽装」ではないだろうか？建物の設計図と計算式から、専門家は正確に耐震強度を求めることができる。これをもとに想定される地震に対して十分な強度を持つ建物を作ることにもできる。これはまさに科学の成果であり、これにより我々は安心して生活することが可能になる。一方で耐震強度の計算は専門家にゆだねられており、非専門家が容易に理解できる領域ではないだろう。このことが専門家の偽装を見逃し、多くの悲劇を生み出してしまった。この事件は技術にたずさわるものの責任の重大さを痛感させるものである。

創世記1章28節にもあるように、神は私たちに世界を管理する責任を与えられた。自然科学はあくまで人々の幸福のために用いられるものであり、人間によって適切に管理されなければならない。キリスト教大学の中で科学技術にたずさわるものとして、単なる技術を教えるだけでなく、「時代のしるし」を見失わない教育を忘れないようにしていきたい。

（理工学部教授）